

ローマ帝政初期における過去の記憶の 形成と「記憶の断罪」について

島 田 誠

はじめに

本稿では二つ問題を論じたい。第一に帝政初期において、政治支配層、特にその頂点に立つ皇帝がローマの過去の歴史の記憶をどのように形成し、それを新たな形で保存しようとしていたのかの問題である。過去の記憶の形成に際しては、過去の出来事の再構成が行われ、新たな過去の解釈を示した上でその新たな過去の記憶を支配層の他の構成員やローマ市民全体に対して提示する必要があったと考えられる。第二には、その政治支配層の一員の記憶に対して行われ、近代以降の研究者によって「記憶の断罪 *damnatio memoriae*」と呼ばれる手続きについての問題である。この手続きの実態、その歴史的な展開、そして記憶の形成全般との関係を考えてい。

この「記憶の断罪」に関する基礎的な研究は、未だ第二次世界大戦前の1936年に公刊された F. Vittinghoff の研究であろう¹⁾。Vittinghoff は、帝政期において反逆罪の付加的な処罰として行われていた被告の死後にその記憶を消去して排除する「記憶の断罪」について、主として法的側面から分析・検討した。さらに彼はこの手続きが皇帝たちにも及んでいたことを論じ、元老院における「死者裁判 *das Totengericht*」の結果、悪帝と

認定された皇帝は、在世中の行為が取り消され、その記憶が抹消されたが、逆に善帝とされると初代皇帝アウグストゥスに倣って神格化されたことを指摘している²⁾。さて本稿において「記憶の断罪」と訳した“*damnatio memoriae*”の語は、すでに Vittinghoff も指摘しているが、古代ローマ時代に実際に使われていた用語ではなく近代の造語であった³⁾。最近 H. I. Flower は「記憶の制裁 *memory sanctions*」の語を用いてより広く古代ギリシア時代の先例から始めて、共和政初期、共和政末期を経て帝政期の後 2 世紀前半に至るまでの同種の事例を検討している⁴⁾。Flower は、“*damnatio memoriae*”という用語を用いると、古代ローマの状況を実際以上に公式かつ静的で変化に乏しいものと暗示してしまうと主張し、法的な観点ではなく、具体的な事例と古代ローマの政治文化における記憶の伝統的なパターンに基づいて古代ローマ社会のエリートたちの「記憶の制裁」に関して研究している⁵⁾。

Flower の研究は、古代ローマ社会における社会的記憶の扱い方についての関心を喚起し、新たな研究の進展をもたらす有意義なものと評価できる。しかしながら、Flower の用いる「記憶の制裁 *memory sanctions*」の語もその対象を限定し過ぎてしまうと筆者は考えている。本稿では、さらに広い「記憶の形成」という表現を用いたい。この「記憶の形成」の表現の中には、記憶を再構成することも含まれる。記憶の再構成の際には、ときに特定の個人や集団の記憶に対する制裁、断罪と呼べる現象が生じる場合もありえる。また意図的ではなく誤解や誤認から過去の歴史の記憶が変容することも、ときにはありえるだろう。そして、古代ローマの歴史の流れの中において、記憶の形成や再構成に注目すると、帝政初期、より具体的には第二代皇帝ティベリウスの時代から特定の個人の記憶への断罪と呼べる現象が顕著となると筆者は考えている。

以下、I 章では、帝政期に先立つ共和政期における記憶の形成の有り様について概観した上で、初代皇帝アウグストゥスによって前 2 年に奉献されたアウグストゥス広場 *forum Augustum* とそこに陳列されていた数多

くの肖像とその台座の銘文や顕彰文に注目し、そこで意図された記憶の形成について検討する。Ⅱ章では、「記憶の断罪」・「記憶の制裁」と呼ばれる現象の概要と先例とされている事例を検討した後に、後19年に死亡した第二代皇帝ティベリウスの養子（甥）ゲルマーニクスに対して決議された数々の顕彰と生前の彼と対立していた有力元老院議員グナイウス・ピソに対して科された「記憶の断罪」を取り上げて、この手続きと「記憶の形成」との関係について改めて考えてみたい。

I. 記憶の形成とアウグストゥス広場

1. 共和政期における記憶の形成について

ある社会が過去についての記憶を形成する際に用いる手段として、最初に想起されるのは歴史叙述であろう。共和政ローマにおける歴史叙述、いわゆる「年代記伝承」は前3世紀後半（前210年頃）のファビウス・ピクトル Fabius Pictor に始まり、その後、アウグストゥス時代の前17年に亡くなったティトゥス・リーウィウス Titus Livius に至るまで計17の年代記 *annales* が著された⁶⁾。それらの中で最後のリーウィウスの叙述は先行する年代記とは文体において一線を画するとされている⁷⁾。しかし、本節において、検討したいのはリーウィウスをはじめとする年代記作家がローマ人の過去を歴史叙述の形で再構成する際にどのような資料を用いたかの問題である。当然先行する年代記は参照にしていたと考えられるが、果たしてそれだけがリーウィウス等の資料であったのであろうか。何か別の資料が存在し、それらが年代記作家たちによって参照されてローマ市民たちの記憶の形成に関わっていたのではないだろうかという疑問が存在する。

この問いに対しては、まずローマ市や地方都市の各所に建てられていた神殿、墓所、凱旋門などの様々な記念建造物 *monumenta* とそこに刻まれた金石文が利用されていた答えることができる。リーウィウスの年代記には直接に記念建造物上の金石文を資料とする記述が散見する。例えば、

前 174 年の出来事として次のような記述が存在する。

「同じ年にマーテル・マートゥータの神殿に以下の銘文を伴う青銅板が設置された。『コンスルのティベリウス・センプローニウス・グラックスの命令権と最高指揮権の下にローマ市民たちの諸軍団と諸部隊はサルディニアを征服した。その属州において、8 万人以上の敵が殺害されるか捕虜となった。国家はきわめて順調に運営され、同盟者たちは自由とされ、歳入は回復され、彼（グラックス）は無傷かつ安全で戦利品に満ちた諸部隊を母国に連れ戻した。2 回目の凱旋式を祝う将軍として、彼はローマの都に入った。この功績の故に、彼はこの青銅板を供物としてユピテル神に捧げた。』サルディニア島の地図があって、そしてそこには戦いの絵が描かれていた⁸⁾」

この記述は、リーウィウスが神殿などの公共建造物に刻まれていた金石文と記念物を直接の史料として用いていた証拠である。

神殿に対して戦利品が供物として奉納された際には、その由来を説明するために銘文を刻まれた青銅や大理石の板が嵌め込まれ、征服地の地図などの記念物も奉納された。それらが年代記作家たちの資料となっていたのである。ただし神殿や金石文などの記念建造物が、年代記作家たちによって、必ずしも建設者の意図通りに理解された訳ではなかったことも指摘されている⁹⁾。そもそもラテン語の monumenta（monumentum の複数形）は「想起させる、思い出させる」ことを意味する動詞 moneo から派生しており、帝政初期に著された古辞書では「monumentum は、何であれ誰かある人の記憶のために造られた神殿、柱廊、文章や詩句のごときものである¹⁰⁾」とされている。この解釈に従えば、年代記などの歴史叙述もまた monumenta の一種となるだろう。

さてリーウィウスなどの年代記には、先行する年代記や記念建造物以外の資料が存在していた可能性がある。前 186 年に起こった「バッカナーリ

ア事件」に注目して、そのような資料について考えてみたい。バックナーリアというのはバックス神の秘密祭儀を意味し、その祭儀での「悪事」が暴かれて厳罰に処されたのがバックナーリア事件である。その密儀への入門のための儀式を受けると自分の全財産を教団に贈与することが要求され、拒絶すると教団がその人を殺害し、財産贈与の契約書が偽造されたなどとされている。その事件に関するリーウィウスの記述では、「悪事」が暴露されるまでの記述と教団を追及して処罰する記述の文体が不統一である点が指摘されている¹¹⁾。教団の「悪事」が暴露される前半部分の記述はロマンティックであり、ドラマティックな展開を示しているが、コーンスルが元老院に事件を報告し、さらに市民たちに状況を伝え、元老院決議や民会決議によって教団が弾圧されるという後半部分の記述は詳細だが堅苦しい文章で記されている。

後半の記述の資料としては先行する年代記の記述も想定できるが、事件に関して発布された元老院決議が参照されていると考えられる。バックナーリア事件に関するローマの元老院決議を刻んだ青銅板が現存し、この決議文ではイタリア中の都市に決議の写しを送って掲示するように規定されている¹²⁾。実際に多数の写しがイタリアの各都市に送られたと考えられ、その一つあるいはローマ市の原本をリーウィウスが読んでいた可能性は高い。

前半部分の記述については、その記述の内容が新喜劇と呼ばれる当時の喜劇のプロットと一致しており、実際に上演された喜劇の筋書きが資料であるとの説が主張されている¹³⁾。当時のローマ市にはバックス神としばしば同一視されるリーベル神の神殿があり、その神域はバックナーリア教団の本拠地とも近接していた¹⁴⁾。その神官や信者たちが、バックナーリア事件が起こると神殿と信者たちの無実を弁明するために劇を作って神殿の祭礼で上演し、それが好評を博して定番の演目になり、その筋書きの一部が年代記の中に取り込まれ、最終的にリーウィウスの記述に取り入れられたと推測されている。

以上のように、リーウィウスをはじめとする古代ローマの年代記作家たちは、先行する年代記のみならず、ローマ市や地方都市の各所に存在する記念建造物とその一部である金石文を重要な資料として用いており、さらに同時代に上演されて人気を博して広く知られるようになった演劇の筋書きなども資料として用いていたと推測できる。そして、この2種類の資料は、リーウィウスなどの年代記作家だけではなく、広くローマ市民たちが過去の記憶を形成する際にも利用されていたと考えられるのである¹⁵⁾。

さらに古代ローマ社会には、演劇の他にも過去の人の業績や同時代の事件の記憶を呼び覚ますパフォーマンスが行われる機会が存在した。その一つは有力家門の葬儀であった。その葬儀で注目されるのは葬列と追悼演説であり、その際には「祖先たちの肖像（マスク）imagines maiorum」が大きな役割を果たしていた¹⁶⁾。この肖像は、一定以上の公職を務めた人が制作することを許可される蠟製のマスクであり、普段は私邸の玄関広間に木箱に入れて安置されていた。この肖像が、葬儀の際には、祖先と体格の似た人に被られ、葬列の中で生前の地位に相応しい随員を引き連れて練り歩き、その家門がどれほどの高い公職に就いた祖先を輩出したかが見物人の眼に見える形で示された。その葬列の途中で追悼演説が行われた。大抵は故人の親戚の若者が演壇に立って、代々の祖先たちの偉業と故人の業績を語った。その演説の間、祖先の肖像をかぶった者たちが演壇の周りを囲んでいた。同時代の重大事件を多くの市民たちに示して記憶に刻み込ませるのが凱旋式における行列 *pompa triumphalis* であった¹⁷⁾。凱旋將軍は部下の兵士と戦争で捕らえた捕虜を引き連れてローマ市内を練り歩いた。その際に征服した地域を示す地図が掲げられ、征服した国々や都市の名前をいちいち書いたプラカードあるいは模型が延々と連なって行列をなした。

これらのパフォーマンスを受けて各種の記念建造物 *monumenta* が建てられることになる。葬儀であれば墓所が造営され、葬られた人物の氏名や死亡時の年齢の他、故人の就任した公職などが記録されていた墓碑銘が設置された。凱旋式であれば戦利品から神々に供物を捧げたり、新たに神

殿が建立されたりして、そこにその由来を記した金石文が刻まれた。また将軍の大理石の像が造られ、その人物の顕彰文が刻まれた。ローマ市をはじめとする諸都市には、このような記念建造物が数多く存在し、それらと一体となった金石文と共にローマ市民が「過去の記憶」を形成する際の重要な資料になっていたと考えられる。

2. アウグストゥス広場について

古代ローマ社会において過去の記憶を形成する際に重要な資料であった記念建造物とそれに付属した金石文の例として、初代皇帝アウグストゥスによって建設され、前2年に竣工したアウグストゥス広場とそこに設置された過去のローマ人たちの肖像と付属の金石文を取り上げたい¹⁸⁾。この広場には、かつてオクターウィアヌス（後のアウグストゥス）が、養父カエサル（カエサル）の復讐を祈願した復讐神マルス Mars Ultor の神殿が付設されている。後3世紀の歴史家カッシウス・ディオ Cassius Dio によれば、アウグストゥスは、2人の孫（養子）のガイウス・カエサルとルーキウス・カエサルに「何らかのコンスル級の権限を用いて *ὁπατικῇ τινι ἀρχῇ*」奉獻することを認めたと伝えている¹⁹⁾。

このアウグストゥス広場は、共和政時代以来のローマ市の政治的・社会的中心であったローマ広場 forum Romanum（現在のフォロ・ローマーノ）の北、宗教的中心であったカピトリーウム（現在のカンピドリオ）の丘の北東に位置している。アウグストゥス自身が「私有地に復讐神マルスの神殿とアウグストゥス広場を戦利品（を売却した資金）から建設した²⁰⁾」と述べており、広場とマルス神殿の敷地はアウグストゥスの私有地であった。広場は基本的に北東から南西方向を長辺とする長方形であり、北東の端にはマルス神殿が建ち、その両側面（北西と南東側）に半円形の張り出し部が存在している。広場の大きさは、北東から南西方向の長さが約120 m、北西から南東方向は半円形の張り出し部分を加えて約105 m（張り出し部分を除くと70 m 余り）である²¹⁾。

アウグストゥス広場は、大理石の敷き詰められた長方形の露天の空間、その空間の両側の柱廊、マルス神殿、神殿両脇の半円形の張り出し部の4つに分かれる。露天空間の中央には、凱旋式用の四頭立ての戦車に乗ったアウグストゥス像が聳えていた。この像の存在は考古学調査では確認されていないが、その基部には前2年に元老院、騎士身分およびローマ市民たちがアウグストゥスを「祖国の父 *pater patria*」と呼んだことが刻まれていたとされる²²⁾。露天空間両側の柱廊とマルス神殿両脇の半円形張り出し部の壁面には壁龕の列があり、そこが過去の偉大なローマ人の大理石像を陳列するギャラリーとなっていた²³⁾。

北西側のギャラリーには、伝説上のトロイアの英雄アエネアス *Aeneas*、彼の息子アスカニウス *Ascanius* を初代とする都市アルバ・ロンガの王たち、そしてアスカニウスの子孫であるユリウス氏 *gens Iulia* の祖先の肖像に始まってアウグストゥスの近親者までの肖像が、恐らくマルス神殿側の端から年代順に陳列されていたと考えられている²⁴⁾。一方、南東側のギャラリーには、やはり伝説上のローマ建国の王ロームルス *Romulus* を筆頭とする7人のローマの王たちに始まり、ユリウス氏以外の家門に属するローマの偉人たち *summi viri* の肖像が陳列されていた²⁵⁾。なおロームルス王もアルバ・ロンガの王族出身であったとされており、ユリウス氏族はローマ建国より古い歴史を誇る家門とすることになる。大理石の像の基部には氏名と履歴した公職 (*cursus honorum*) が刻まれた銘文 *titulus* が刻まれ、その壁龕の下の壁面にはより詳細な功績が記された顕彰文 *elogium* が嵌め込まれていた²⁶⁾。

さてアウグストゥスがこの広場を建設して過去のローマ人たちの肖像と顕彰文を設置した理由については、後2世紀の伝記作家スエートーニウスが次のように伝えている。広場が建設された理由については「広場の建設の理由は人々と裁判の多さである。その多さが二つの広場では不十分に、三つ目を必要に思わせた。そこで、さらに急いで未だマルス神殿が完成していないのに、公開されて国家の裁判や審判人の抽選が行われることが定

められた²⁷⁾」とされている。一方、過去のローマの偉人たちの肖像と顕彰文を設置した理由については「不滅の神々の次に将軍たちの記憶の名誉を優先した。彼らがローマ市民たちの支配権を最小から最大にしたのだ。そこで、各人の（建てた）建造物を銘文を元のままに再建し、凱旋式の姿をした全員の肖像を自分の広場の両方の柱廊に安置し、そして布告で『私がそのことを発案したのは、私が生きてる間は私自身が、そして将来の世代の第一人者たちが、あたかも手本に従うように彼らの生涯に倣うように市民たちに要求されるためであった』と告げた²⁸⁾」と述べている。

上記のスエートニウスの伝える理由は、実用的あるいは教訓的なものであると言えよう。しかしながら、この広場と過去のローマの偉大な将軍たちの肖像と顕彰文の陳列は、本稿で述べてきた記念建造物とそれに付属する金石文がローマ社会における「記憶の形成」に果たして来た役割からすると、スエートニウスが伝えるような実用的・教訓的目的のみで建設されたとは考えられない。アウグストゥス広場とそこでの肖像と顕彰文の陳列は、アウグストゥスによるローマの歴史の再解釈、ローマ人の過去の記憶の再構成の結果を示すものであると考えられるのである²⁹⁾。

では、この広場と過去の偉大な将軍たちの肖像と顕彰文の陳列を用いて、アウグストゥスが具体的に示したかったメッセージはどのようなものであったのだろうか。筆者の考えでは、この広場の2つのギャラリーでは、アウグストゥスの体制を正当化する2つの理念が提示されていたように思われる。

南東側のギャラリーには、初代ロームルス王を始めとする7人の王たちを除き、86人余りの共和政ローマの将軍の肖像と顕彰文が陳列されており、その中の25人については氏名が判読できるか推定することでき、銘文や顕彰文もその確実さは様々であるが復元することが可能である³⁰⁾。名前の判明している肖像から考えると、これらの共和政の凱旋将軍たちは正しくローマの歴史を代表する歴史上の偉人たちであると言える。

主な例を挙げてみよう³¹⁾。共和政ローマ最初の対外戦争の勝利である

前 496 年のレギッルス湖畔の戦いを指揮したアウルス・ポストゥミウス Aulus Postumius、前 390 年のガリア人によるローマ市攻撃前後の苦難の時代にローマ軍を率いたマルクス・フリウス・カミッルス Marcus Furius Camillus、エピールスのピュロス王との講和を拒絶させたアッピウス・クラウディウス・カエクス Appius Claudius Caecus、第一次ポエニ戦争で初めて海戦での勝利をローマにもたらしたガイウス・ドゥイリウス Gaius Duilius、第二次ポエニ戦争でローマを指導したクイントゥス・ファビウス・マクシムス Quintus Fabius Maximus、カルタゴの將軍ハンニバルを破ったプーブリウス・コルネーリウス・スキープオー・アーフリカーヌス Publius Cornelius Scipio Africanus、マケドニア王国を滅ぼしたルーキウス・アエミリウス・パウッルス Lucius Aemilius Paullus、カルタゴを滅ぼしたプーブリウス・コルネーリウス・スキープオー・アエミリアーヌス Publius Cornelius Scipio Aemilianus、共和政末期の内乱の主役であったガイウス・マリウス Gaius Marius とルーキウス・コルネーリウス・スッラ Lucius Cornelius Sulla、ポントス王ミトリダテスを破ったルーキウス・コルネーリウス・ルクッルス Lucius Cornelius Lucullus などである³²⁾。

このような南東側のギャラリーの肖像と顕彰文は、アウグストゥスの支配体制と共和政との継続性を語っていると考えられる。恐らくは凱旋將軍の衣装を着て四頭立ての戦車に乗った自らの肖像を広場の中央に置いたアウグストゥスは、自らが共和政の偉大な凱旋將軍たちの正統な後継者であるとの立場を誇示していたと考えられる。そして、この理念は前 27 年から提起されてきたアウグストゥスが共和政時代の国家体制を復興したとする主張とも一致していた。アウグストゥスは死の前年に書いた自らの『業績録』の中で前 27 年の出来事を「万人の同意によって国事全てを掌中にしていた私が、国政を私の権限から元老院およびローマ市民たちの判断に委ねた」と述べ、ティベリウス時代の歴史家ウェレーイユス・パテルクルスはこの出来事を「かの昔日の古き国家の姿が甦った」と評価しているの

である³³⁾。

では北西側のギャラリーに陳列された肖像や顕彰文は、どんなメッセージを語っているのだろうか。こちら側のギャラリーには、アルバ・ロンガの14人の王たちを含めて、少なくとも30人から40人の肖像と顕彰文が陳列されていたと推定されている³⁴⁾。ここでは、アウグストゥスが所属するユーリウス氏族の家系がアルバ・ロンガの王たちを経て英雄アエネアス、さらにウェヌス女神にまで遡ることが強調されていると考えることができる。

さて、ユーリウス氏族は古い家系を誇る名門ではあるが、共和政の歴史において大きな役割を果たした人物はあまり知られていない。北西側のギャラリーのユーリウス氏の肖像の中、氏名が推定でき、その経歴が特筆できるのは、前489年にコンスル、前451年に十二表法制定十人委員を務めたと推定できるガイウス・ユーリウス・ユールスのみであろう³⁵⁾。そして、独裁官カエサル之父であり、プラエトルを務めたガイウス・ユーリウス・カエサル Gaius Iulius Caesar pater divi Iuli を経て、ユーリウス氏に属さないアウグストゥスの近親者の肖像が続くことになる³⁶⁾。アウグストゥスの実父ガイウス・オクターウィウス Gaius Octavius pater Augusti、アウグストゥスの甥で一人娘ユーリアの最初の夫であったマルクス・クラウディウス・マルケルス Marcus Claudius Marcellus、アウグストゥスの妻リーウィアの連れ子であって前9年にゲルマニア遠征中に死亡したネロー・クラウディウス・ドルースス・ゲルマーニクス（大ドルースス）Nero Claudius Drusus Germanicus などの肖像が並べられた。

問題は、前2年の時点においてアウグストゥスがローマの建国以前にまで遡るユーリウス氏族の古い歴史を強調する肖像と銘文の展示を行った理由である。多くの研究者が注目するのは、アウグストゥスが60歳を越えて老年にさしかかり、彼の後継者と目されていた孫で養子とされていたガイウス・カエサル Gaius Caesar とルーキウス・カエサル Lucius

Caesar の兄弟が相次いで成人し、権力の継承が目前と感じられるようになっていたことである³⁷⁾。前 20 年生まれの間ガイウスは前 5 年に、前 17 年生まれの間ルキウスは正にこの前 2 年に成人となっており、「若者たちの第一人者 princeps iuventutis」の称号を与えられ、アウグストゥス自身も前 23 年に自ら辞職してから固辞していたコンスル職に両年に限って就任しており、成人となった孫たちを政治的に後援していたと考えられる³⁸⁾。即ち、血統による権力の継承を意図したアウグストゥスが、自らの所属するユリウス氏族の家門の由緒正しさを強調するために、トロイヤの英雄アエネアスに至る祖先の肖像と銘文の展示を行ったのである。

以上の検討から、アウグストゥス広場とそこに設置された過去のローマ人たちの肖像と付属の金石文を展示することによって、アウグストゥスは二つの異なった目的のために、ローマの歴史を再解釈し、再構成された過去の記憶を広場を訪れるローマの市民たちに提示したと考えられる。一つは、アウグストゥスが共和政の偉大な將軍たちの正統な後継者であることを示し、共和政体とアウグストゥス政権との間に継続性を強調し、現在のアウグストゥス体制の正統性を再確認することを目的としていた。今一つは、アウグストゥスの所属するユリウス氏族の由緒ある家系を想起させ、来るべきアウグストゥスから孫の間ガイウスとルキウスへの権力の継承を順調に行わせることを意図していた。

なお、アウグストゥスの意図した権力の継承は、後 2 年のルキウス・カエサル、後 4 年の間ガイウス・カエサルの死によって挫折し、アウグストゥスは妻リーウィアの連れ子であったティベリウスを養子として権力を継承させた。

II. 「記憶の断罪」とゲルマーニクス・ピソー事件

1. 「記憶の断罪」の概要とその先行例について

Vittinghoff 以来の研究史において「記憶の断罪 *damnatio memoriae*」

と呼ばれている現象の概要をまず明らかにしたい。従来の研究の多くでは「記憶の断罪」は、反逆罪 *crimen maiestatis* によって有罪とされた者への付加的な処罰と見なされてきた。Vittinghoff は、この処罰を「肖像への罰 *Bildstrafe*」、「名前への罰 *Namensstrafe*」、「墓と哀悼の禁止 *Grab-und Trauerverbot*」の3種に分けて論じているが³⁹⁾、この分類は必ずしも明確のものではなく、その境界線も判然とはしない。大理石や青銅の肖像などの記念建造物と付属の金石文の破壊などは「肖像への罰」と「名前への罰」の双方に関わると考えられる。実際の研究でも箇々の具体的な処罰が羅列的に述べられることが多く⁴⁰⁾、その羅列的な提示の方がむしろ内容を把握しやすいと思われる。以下でも、具体的な処罰を列挙する。

国家もしくは皇帝（と近親者）に対して反逆したか、国家の敵 *hostis publicus* と認められた人物に関して、ローマ元老院は、以下のような処罰を決定するとされる。1) その人物に関わる記念建造物と金石文が破壊される。2) 名前を公職者・神官のリストから削る。3) 肖像 *imago* を葬儀などの際に市民たちに公開すること、葬儀での哀悼を禁止する。4) 子孫がその者の個人名（ガイウスやマルクス等）を名乗ることを禁止する。5) 著作を破棄する。6) その者の誕生日がローマ市民たちにとって不吉な日である凶日（*dies nefastus*）とされる。7) 私宅を破壊する。8) 所有財産を没収し、遺言を無効とする。

これらの処罰中、7) の私宅の破壊は共和政期には知られるが、帝政期には適用例が知られず、実施されなくなっていたと考えられる⁴¹⁾。8) に関しては「記憶の断罪」の範疇に入れるのは無理があるように思われるが、反逆罪に対する「記憶の断罪」に伴って科されることが多い。「記憶の断罪」そのものではないが、古代ローマにおいて関連する罰則と看做されていたことは否定できない。一方、1) から6) までは基本的に記憶に関する断罪あるいは制裁であると考えられることができるが、5)・6) が実際に適用された事例は少ない。結論として、1) から4) までの4つの罰が

「記憶の断罪」に伴って必ず科される処罰であると看做すことができる。

次に共和政初期における「記憶の断罪」の先行例とみなされている事例を取り上げ、帝政成立期に至るまでのローマ社会における個人の記憶をめぐる争いの歴史を概観したい。

共和政初期において「記憶の断罪」あるいは「記憶の制裁」を蒙った人物として、次の3人の著名な政治家が挙げられることが多い。スプリウス・カッシウス *Spurius Cassius*、スプリウス・マエリウス *Spurius Maelius*、マルクス・マンリウス・カピトーリーヌス *Marcus Manlius Capitolinus* の3人である。

スプリウス・カッシウスは、前502年・前493年・前486年の3回にわたって最高公職のコンスルを務め、前493年にはローマとラテン人諸都市との間のカッシウス条約を締結して誕生したばかりの共和政ローマの対外関係を安定させた共和政初期を代表する政治家の1人であった。そのカッシウスが、3回目のコンスル在任中に新たに獲得した領土や不法に占有されている公有地を平民たちに再分配しようとしたため任期終了後の前485年に王となることを目指したとして告発されて処刑された上で、彼の家が破壊され、跡地にテッルス神殿が建立されたと伝えられている⁴²⁾。スプリウス・マエリウスは、裕福な騎士であったが、前439年に穀物を私費で輸入して安価に配布したため王位を目指しているのではと疑われて殺害され、国家への反逆と陰謀の嫌で彼の家の壁は引き倒され、その財産は国家に没収された⁴³⁾。マンリウス・カピトーリーヌスは、前390年にローマ市がガリア人に攻撃された際、鷲の鳴き声で襲撃を察知してローマを滅亡から救った救国の英雄であったが、自らの財産を売却して貧窮している平民を救済したため国家への反逆の嫌で告発されて処刑され、彼の家は破壊された⁴⁴⁾。

これらは、ローマ共和政初期における血統的な貴族 *patricii* と平民 *plebs* との対立抗争である身分闘争的一幕として、いずれも古代ローマ人の間ではよく知られた有名な逸話である。しかしながら、それらの伝承が

どこまで史実を反映したものであるのかどうか確認することは難しく、また彼らの私宅の破壊や財産の没収が「記憶の断罪」あるいは「記憶の制裁」と看做すことは困難であると言えよう⁴⁵⁾。この時代の事例を帝政期の「記憶の断罪」の展開と歴史的に結びつけて論じることはできないと考えられる。

さて帝政期の「記憶の断罪」の直接の先行例と考えられるのは、グラックス兄弟の改革以降の共和政末期において顕著となる政敵の記憶への攻撃である。

前121年にガーイウス・センプローニウス・グラックス Gaius Sempronius Gracchus とその支持者で前125年コンスルであったマルクス・フルウィウス・フラックス Marcus Fulvius Flaccus 等が元老院最終決議 *Senatus consultum ultimum* という事実上の戒厳令の下で殺害され、遺体がティベリス川に投棄された。その際、妻や女たちが嘆き泣くことが禁止され、財産の没収、家の破壊が行なわれた⁴⁶⁾。これに反発した民衆は、グラックス兄弟の肖像を制作して人目を引く場所に据え、さらに彼らが殺害された場所を浄めて供物を捧げ、その場所はあたかも神域のようになったとも伝えられている⁴⁷⁾。さらに前103年と105年の護民官 Appleius が元老院最終決議の下で殺害されると、彼の財産は没収されて家は破壊された⁴⁸⁾。さらに彼の肖像を私的に所有することも禁じられていたとの伝えもある⁴⁹⁾。

このような打倒した政敵の記憶への攻撃は、紀元前80年代の血腥い内乱とそれを勝ち抜いた独裁官スッラによって頂点を極めた。スッラと彼のライバルであるマリウスは互いに相手をローマ国家の敵 *hostis* のと宣言して内乱を戦ったが、マリウスは亡命先のアフリカからローマに帰国した後、前86年1月13日に亡くなった。その後、スッラは、東方から大軍を率いてイタリアに上陸し、前82年11月1日にローマ市を攻略して内乱に勝利した。彼は、政敵の財産没収と法的保護の剥奪を宣告したが、既に死亡していた最大の政敵マリウスへの攻撃の手を緩めず、その墓を暴いて遺

灰を散じた⁵⁰⁾。さらにマリウスの記念建造物、肖像などのローマの街中から撤去されたと考えられている⁵¹⁾。

その後、カエサルからアウグストゥスの時代にかけて、政敵の記憶に対する攻撃は鎮静化したと考えられる。独裁官カエサルは、政敵に対して寛容な態度を示し、政敵の記憶についてもスッラとは正反対の政策を採ったのである⁵²⁾。カエサルの養子である初代皇帝アウグストゥスは、カエサル死後の内乱に勝利後、政敵のアントーニウスの名前をコンスル表などから一時的には削ったことが確認できるが、最終的に政敵の名前を再び刻み込ませている⁵³⁾。このアントーニウスの記憶の復権には、オクターウィアヌス（後のアウグストゥス）の姉でアントーニウスの妻であったオクターウィアを通じて、アントーニウスの遺児たち（息子1人と娘2人）が「アウグストゥスの家 domus Augusta」の一員となったことが大きな役割を果たしていたと考えられる⁵⁴⁾。

2. ゲルマーニクスの死とピソー裁判

カエサルとアウグストゥスの下での言わば「記憶の和解」と呼ぶべき状況は、第2代皇帝ティベリウスの時代になると大きく変容し、「記憶の断罪」と呼ぶことのできる事例が出現するようになる。そして、それは皇帝に対する不敬行為 *impietas in principem* が実質的に反逆罪に含まれるようになる過程と軌を一にしていると考えられる⁵⁵⁾。その過程の始まりは、アウグストゥス死後2年目の後16年に起こったマルクス・スクリーボーニウス・リボー・ドルスス Marcus Scribonius Libo Drusus の事件と考えられる。この年、年若い元老院議員であったリボー・ドルススが反逆罪で告発されて自殺した後に、その財産は告発者たちに分配されたが⁵⁶⁾、「その際、コッタ・メッサリーヌスがリボーの肖像が子孫の葬儀に随伴しないことを、グナイウス・レントゥルスが何人もスクリーボーニウス氏の者がドルススの名前を名乗らないことを提案した⁵⁷⁾」のである。

このような傾向が最終的に顕在化したのは、後19年10月10日に第2

代皇帝ティベリウスの養子であり、次代皇帝の最有力候補者であったゲルマーニクスが東方の属州シリアにおいて死亡した際であった。ローマ市民たちの間に絶大な人気のあったゲルマーニクスの死は大きな混乱と悲しみを引き起こした。歴史家タキトゥスは「大衆のこの（ゲルマーニクスの境遇に同情した）会話は彼の死を聞いて、一層火が点いて公職者たちの告示や元老院決議以前に喪に服して諸広場は人気が無くなり、家々は門を閉ざした程であった。至る所に沈黙と哀悼の声があり、決して体裁を繕ってはいなかった。（形式的な）服喪の標を付ない訳でないとはいえ、心の奥底から哀しんでいたのだ」と、伝記作家ステニウスは「彼のなくなった日には、石が神域に投じられ、神々の祭壇が覆され、幾つかの家から家族の守り神が公衆の前に投げ出され、妻たちの生んだばかりの赤ん坊が遺棄された」とそれぞれ伝えている⁵⁸⁾。

そのような混乱とローマ市の大衆の間での不穏な雰囲気を受けて、その年の12月16日にローマ元老院は亡きゲルマーニクスに対する数々の榮譽を授ける決議を行った⁵⁹⁾。さらに翌20年には、シリア総督（皇帝代理 *legatus Augsti provinciae Syriae*）であったが、ゲルマーニクスと生前に不仲であって彼の死後に武力衝突を起こしていた有力元老院議員グナエウス・ピソーが元老院に訴えられた⁶⁰⁾。ピソーがゲルマーニクスの死に責任がある（毒殺した）ことは証明されなかったが、ゲルマーニクスに公然と敵対して属州駐屯のローマの軍隊の間に紛争を引き起こしたことについては弁明できず、裁判中に自宅で喉を剣で突いて自殺した姿で発見された⁶¹⁾。その後も、皇帝ティベリウス自らの主宰で元老院での審議が続き、ピソーに対する処置が決定された⁶²⁾。

さて1980年代にスペイン南部セビーリャ地方で相次いで発見された青銅板にゲルマーニクスとピソーに関する2つの元老院決議が刻まれているのが発見され⁶³⁾、その具体的内容を知ることができるようになった。以下では、その条項からゲルマーニクスの記憶を賞揚し、その永続化を図る方法とピソーの記憶を断罪する条項の関係を改めて検討したい。

まずゲルマーニクスに関する決議の要旨を項目別にまとめてみる。なお、項目の最後の〔 〕内のアルファベットは青銅板のどの断片かを、ローマ数字はコラムを、アラビア数字は行を表わすものである。

- 1) ローマ市のフラミニウス競走場に大理石の凱旋門を建てること [a. I. 9-10]。
- 2) 1) の門の正面に、彼の打ち破った諸民族を表わす像と共に、ゲルマーニア、ガリア、東方の諸属州での功績と職務遂行中に亡くなったこと故に「元老院とローマ市民たちがゲルマーニクス・カエサルの記憶のために捧げたと⁶⁴⁾」刻むこと [a. I. 11-18]。
- 3) 1) の門の上に凱旋式の戦車に乗ったゲルマーニクスの肖像を設置し、その肖像の側に実父、母、妻、妹、弟、息子たちと娘たちの肖像を置くこと [a. I. 18-21]。
- 4) 2つ目の門が、シリアのアーマヌス山稜もしくはティベリウス帝が適当と考える場所に建てられてゲルマーニクスの肖像が設置され、彼の功績が刻まれること [a. I. 23-26]
- 5) 3番目の門が、ライン河畔の実父ドルススの墓稜の側に建てられ、毎年ゲルマーニクスの命日に犠牲が捧げられること [a. I. 26-34]。
- 6) ゲルマーニクスが荼毘に付されたアンティオキアの広場と彼が死亡したダフネーに記念建造物が置かれること [a. I. 35-37]。
- 7) 毎年、ゲルマーニクスの命日の10月10日に彼の霊のための犠牲祭が、ガイウス・カエサルとルーキウス・カエサルの霊のために行われていると同様に行われ、その日にはローマ市や地方都市において公職者が重要業務や公式の饗宴を行わず、またローマ市民たちが結婚や婚約の儀式を行わず、契約を締結せず、競技や見世物を催さないこと。[b. I. 1-11]。
- 8) 凱旋式の衣装を着たゲルマーニクスの肖像が、ローマ市大衆 plebs urbana の負担で造られて銘文を付けて、アウグストゥスが父の大ド

ルーススの肖像を置いた公共の場に立てられること [b. II. 7-10]

- 9) ゲルマーニクスの全生涯と美德を「永遠の記憶に伝える aeternae tradi memoriae」ために養父の皇帝ティベリウスの読み上げた文書を青銅板に刻んで公共の場に掲示すること [b. II. 11-17]
- 10) 同じく義弟のドルーススの読み上げた文書が、青銅板に刻まれて掲示されること [b. II. 18-19]。
- 11) この元老院決議を青銅板に刻み、元老院の会議の開催されたパラティウムの丘のアポロ神殿の柱廊で掲示すること [b. II. 20-21]。
- 12) 「ドムス・アウグスタに対する全ての身分の忠誠と敬意を払われるべきゲルマーニクス・カエサルの記憶がより容易に示されるために⁶⁵⁾」コンスルが、この決議をイタリアと諸属州の地方都市に写しを送付し、属州に責任を持つ者たちは最も繁華な場所に掲示されるように務めること。

さて、この元老院決議は、2)・9)・12) で明記されているようにゲルマーニクスの記憶を永続化すること、永遠に伝えることを目指している。そのための手段として選ばれたのが、つぎの3つである。1) から 6) および 8) では記念建造物とそれに付属した金石文の建造が命じられている。7) ではゲルマーニクスの亡くなった日における犠牲祭とその日にローマ市民たちが言わば喪に服して重要な事を行わない事が定められている。9) から 11) までは金石文単独の掲示が命じられているのである。皇帝ティベリウスの主導の下に、ローマの元老院が行ったゲルマーニクスの記憶に関するこの決議は、I章で述べた古代ローマにおける「記憶の形成」の典型例であったと言えるだろう。なお 8) で言及されているゲルマーニクスの肖像の立てられる公共の場とは、本稿I章2節で検討したアウグストゥス広場の北東の柱廊を指していると考えられる⁶⁶⁾。

ピソーに関する元老院決議においては、まず死の床でのゲルマーニクスのピソーへの非難、ピソーがゲルマーニクスの死後に内乱を起こしたこと、

軍隊の規律を乱したこと、ゲルマーニクスの死を公然と歓迎したことなどをあげてピソーを有罪とした上で⁶⁷⁾、自殺した被告ピソーに対して科された罰を列挙している。以下では、個々の罰を記している部分について、項目別にその要旨をまとめた。なお〔 〕内の数字は行数を表わしている。

- 1) 女たちによって祖先の風習に従ったピソーの死への悲嘆が為されぬこと [73-75]。
- 2) 何処に設置されていようが、ピソーの肖像や彫像が取り除かれること [75-76]。
- 3) 誰かカルプルニウス家の親族や姻族が死亡した際、他の祖先の肖像に混じってピソーの肖像が葬礼に持ち出されないこと、また他のカルプルニウス家の肖像と共に彼の肖像が置かれぬこと [76-82]。
- 4) ゲルマーニクスの彫像の銘文からピソーの名前が削られること [82-84]。
- 5) ピソーの財産が没収されること [84-90]。
- 6) 皇帝から贈与されていた土地を除いて上記の没収財産の半分が息子のグナエウス・ピソーに与えられ、さらに、その厚意に感謝して息子のグナエウス・ピソーが父と同じ名前（グナエウス）を変えること [90-100]。
- 7) もう一人の別の息子マールクス・ピソーに、残りの半分の財産が与えられ、娘のカルプルニアに嫁資として 100 万セステルティウスと特有財産として 400 万セステルティウスが与えられること [100-105]。
- 8) グナイウス・ピソーが、自分の私宅と結合するためにフォンティナース門の上に設置した構造物を除去すること [105-108]
- 9) 皇帝ティベリウスの母ユーリア・アウグスタ（リーウィア）の取りなしで、ピソーの妻ブランキアの罪を免じること [108-119]。

- 10) ピソー部下たちが追放され、彼らの財産が没収されること [119-123]
- 11) 皇帝一家、ゲルマーニクスの遺族に対するの元老院の哀悼の念と慰めの表明と称讃、騎士身分の配慮と献身への称讃、ローマ市住民を皇帝とゲルマーニクスの記憶とに対する献身の故に称讃、兵士たちの忠誠への称讃 [123-166]。
- 12) 全ての経過が子孫たちの記憶に伝えられ、ゲルマーニクスの希有の自制とピソーの悪事を知ることが出来るように、皇帝の読み上げた演説とこの元老院決議が青銅板に刻まれて、皇帝が適当と思う場所に公示されること [166-172]。
- 13) 青銅板に刻まれたこの元老院決議が、各属州の最も人口稠密な都市、最も繁華な場所に掲示され、さらに各軍団の駐屯地の軍団旗の側に掲示されること。

以上の項目の中では1) から4) まだが、直接的に「記憶の断罪」に関わっている。1) と3) は、ピソーの死に対する女たちの哀悼とピソーの肖像が一族の葬儀に連なることが禁止されている。2) と4) によって肖像などの記念建造物の破壊と彼の名前を記録した金石文の削除が命じられている。さらに6) においては、没収された家産の返還に関わって、息子が父親と同じ名前を改名することが命じられているのである。5) から7) までは、「記憶の断罪」と関連があると見なされる財産の没収と返還に関わる条項である。

さて、この元老院決議で注目すべきなのは、次の2点であろう。まず第1に少なくともティベリウス時代に記憶に対する制裁、「記憶の断罪」が、正式な罰則となっていたことである。ガーイウス・グラックスに始まり、スッラに至る共和政時代の先例は、法的な罰と言うよりは政治的攻撃と看做することができるものであったが、皇帝の発議に基づく元老院での審理と決議による処罰は公式なものと言わざるを得ない。この処置には「記憶の

断罪」という呼称が相応しいと筆者は考えている。第2に、このピソーに対する「記憶の断罪」が、単にピソーの記憶の抹消を目指すものではないと考えられることである。

ピソーを断罪する元老院決議は、先に検討したゲルマーニクスの荣誉に関する元老院決議と対になっている。12)における「行われた審理のすべてを顛末を子孫たちの記憶に posterorum memoriae より容易に伝えることで、彼らがゲルマーニクス・カエサルの特典の自制と父ピソーの悪事について元老院が如何に判断したかを知ることができるために⁶⁸⁾」の文から明らかなように、この元老院決議はピソーの記憶が抹消されて永遠に忘れ去られることを目指しているのではなく、逆にゲルマーニクスの荣誉の記憶とともに永遠に残ることを意図していた。ピソーの「記憶の断罪」は、ゲルマーニクスの「記憶の形成」と表裏の関係にあり、一体と看做されていたのである。すなわち「記憶の断罪」あるいは「記憶の制裁」は、飽くまで「記憶の形成」の不可分の一部であったと考えられるのである。

おわりに

最後に、本稿での検討の結果を簡単にまとめたい。

記憶の形成に関しては、まず二つの結論が得られた。第一に、古代ローマ人が過去の記憶を形成する際には、祭礼で上演される劇、有力家門の葬列とそれに連なる祖先の肖像や追悼演説、凱旋式における行列などのパフォーマンスが資料となり、さらにそれらのパフォーマンスを受けて制作される墓所、神殿、凱旋門、彫像などの様々な記念建造物とそれらと一体となっている金石文が重要な資料として用いられていた。第二に、初代皇帝アウグストゥスは、前2年に完成したアウグストゥス広場とそこに展示した過去の偉大な将軍たちと自らの属するユリウス氏族の祖先たちの肖像と顕彰文を用いて、自らの支配体制と来るべき権力継承の方針を正当化す

るために、ローマの歴史を再解釈し、再構成された過去の記憶を広場を訪れるローマの市民たちに提示していた。

次に「記憶の断罪」の全般的な特徴として、帝政期には国家もしくは皇帝に反逆したと看做された人物に対して、記念建造物と金石文の破壊、公職者・神官のリストからの名前の削除、葬儀などの際に肖像 *imago* を市民たちに公開することの禁止と哀悼の禁止、子孫がその者の個人名を名乗ることの禁止などの処罰が下されていたこと、そして「記憶の断罪」の先行例としては、共和政末期に頻発するようになった政敵の「記憶への攻撃」が考えられることが判明した。さらに後 19 年に亡くなった皇帝ティベリウスの甥ゲルマーニクスの記憶を永続化することを目指す元老院決議と彼と対立していた元老院議員ピソの『記憶の断罪』に関する元老院決議から、少なくともティベリウス時代に記憶に対する制裁、「記憶の断罪」が公式な罰則となっていたことも明らかとなった。

最後に、やはりゲルマーニクスとピソの元老院決議の検討から『記憶の断罪』の目的が記憶を抹消することではなく、讃えられるべき記憶と共にその汚名が永遠に残ることを意図していたこと、すなわち「記憶の断罪」は「記憶の形成」と一体と看做されており、「記憶の断罪」は「記憶の形成」の不可分の一部であったことが明らかとなった。

註

- 1) F. Vittinghoff, *Der Staatsfeind in der römischen Kaiserzeit: Untersuchungen zur "damnatio memoriae"*, Berlin 1936. 特に *ibid.*, pp. 12-51 および pp. 64-74 では「記憶の断罪」の基本的なあり方と法的意義の分析が行われている。なお近年の研究では Eric R. Varner, *Mutilation and Transformation: Damnatio Memoriae and Roman Imperial Portraiture*, Leiden・Boston 2004, pp. 1-20 が「記憶の断罪」の概観として参考になる。
- 2) Vittinghoff, *op. cit.*, pp. 75-98.
- 3) *Ibid.*, p. 66. なお Varner, *op. cit.*, p. 2, n. 3 によれば、*damnatio memoriae* の語は 1689 年の博士学位請求論文に初めて出現すると言う。
- 4) H I. Flower, *The Art of Forgetting: Disgrace & Oblivion in Roman Political*

Culture, Chapel Hill, 2006.

- 5) Ibid., pp. xix f.
- 6) ローマ共和政の年代記作家一般については、例えば Ronald Mellor, *The Roman Historians*, London and New York, 1999, pp. 14-19 を、リーウィウスについては ibid., pp. 48-75 を参照されたい。また本質的に共和政ローマの自由かつ貴族政的な政体の歴史であったとされる「年代記伝承 the Annalistic Tradition」の性格については、B. W. Frier, *Libri Annales Pontificum Maximorum: The Origin of the Annalistic Tradition*, 2nd. ed. Ann Arbor 1999, pp. 201-221 を参照されたい。なお、Frier の研究書の初版は 1979 年刊行であるが、本稿では初版刊行後の研究の進展を紹介した著者による序文の付された第 2 版を用いている。
- 7) Freier, op. cit., p. 202 は、リーウィウスが少なくともラテン年代記作家の散文文体から逸脱しており、彼の歴史家としての特異さが彼に先行する年代記作家の達成したものを評価するためには不確実なガイドとしてしていると指摘している。
- 8) Livius, *Ab urbe condita*, 41. 28. 8-10: "eodem anno tabula in aede matris Matutae cum indice hoc posita est: 'Ti. Semproni Gracchi consulis imperio auspicioque legio exercitusque populi Romani Sardiniam subegit. in ea prouincia hostium caesa aut capta supra octoginta milia. re publica felicissime gesta atque liberatis sociis, uectigalibus restitutis, exercitum saluom atque incolumem plenissimum praeda domum reportauit; iterum triumphans in urbem Romam redit. cuius rei ergo hanc tabulam donum Ioui dedit.' Sardiniae insulae forma erat, atque in ea simulacra pugnarum picta." なお、この人物は、有名なグラックス兄弟の父親であり、彼の凱旋式が祝われたのは、前年（前 175 年）のことである。T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic*, vol. 1. 509B.C. - 100B.C., Atlanta 1951, p. 402 を参照のこと。
- 9) T. P. Wiseman, *Historiography and Imagination, Eight Essays on Roman Culture*, Exeter 1994, pp. 37-48.
- 10) Festus (Paulus) 123 L: "momumentum est... quicquid ob memoriam aluius factum est, ut fana, porticus et carmina." この古辞書は、アウグストゥス時代の文法家ウェッリス・フラックス Verrius Flaccus の著したものを後 2 世紀のフェストゥス Sextus Pompeius Festus が抜粋したものである。引用した部分はさらに 8 世紀の修道士 Warnefred Paulus Diaconus の要約した部分にある。本稿では、W. M. Lindsay の編纂による Teubner 版、*Sexti Pompei Festi de verborum significatu quae supersunt cum Pauli epitome, Thewrewkianis copiis usu edidit Wallace M. Lindsay*, Leipzig 1913 (reprinted by Georg

Olms Verlag, Hildesheim & New York, 1978) を用いている。

- 11) Livius, *Ab urbe condita*, 39. 8. 1-19. 7. 前半部分は ibid. 39. 8. 1-14. 2、後半部分は ibid., 14. 3-19. 7 で記述されている。
- 12) *Corpus Inscriptionum Latinarum* (以下 CIL と略記), X, 104=*Inscriptiones Latinae Selectae*, 18=*Inscriptiones Latinae Liberae Rei Publicae*, 511.
- 13) T. P. Wiseman, *Roman Drama and Roman History*, Exeter, 1998, pp. 43-48.
- 14) Ibid., p. 41.
- 15) Wiseman, *Historiography and Imagination*, p. 17 は、劇の史実性への信頼は「無知な大衆」には限定されず、人口の大多数にとって神話や歴史に関する知識の大半は祭礼の場で演じられたの劇で見た内容から成っていたと述べる。
- 16) 古代ローマにおける葬儀に関しては、J.M.C. Toynbee, *Death and Burial in the Roman World*, London 1971 を参照されたい。「祖先たちの肖像（マスク）imagines maiorum」については、H. I. Flower, *Ancestor Masks and Aristocratic Power in Roman Culture*, Oxford 1996、毛利 晶「「イマーギネース・マヨールム考」『西洋史研究』新輯 31 号、2002 年および同「共和制期ローマのイマーギネース・マヨールム—その法的権利に関する考察を中心に—」『史学雑誌』第 112 編 12 号も参照されたい。
- 17) 凱旋式に関しては、H.S. Versnel, *Triumphus: An Inquiry into the Origin, Development and Meaning of the Roman Triumph*, Leiden 1970 を参照のこと。
- 18) この広場について現在最も包括的な研究は、M. Spannagel, *Exemplaria Principis: Untersuchungen zu Entstehung und Ausstattung des Augustusforums*, Heiderberg 1999 である。また、この広場の構造については V. Kockel, "FORUM AUGUSTUM", in: E.M. Steinby (ed.), *Lexicon Topographicum Urbis Romae*, vol. 2, Roma, 1995, pp. 289-295 を参照のこと。なお、我が国での研究としては、広瀬三矢子「フォルム・アウグストゥムについて：前 2 年のアウグストゥス」『古代文化』43-10、1991 年、1-14 頁がある。
- 19) Cassius Dio, 55. 10. 6.
- 20) *Res gestae divi Augusti*, 21: "In privato solo Martis Ultoris templum forumque Augustum ex manibiis fecit".
- 21) Kockel, op. cit., p. 290 & p. 454, fig. 117.
- 22) Ibid., 290; *Res gestae divi Augusti*, 35.
- 23) Kockel, op. cit., pp. 290f. なお、この古代ローマの偉人たちの肖像のギャラリーに関する最近の研究としては、Spannagel, op. cit., pp. 256-358; J. Geiger, *The First Hall of Fame: A Study of the Statues in the Forum Augustum*, Leiden・Boston, 2008 がある。

- 24) P. Zanker, *The Power of Images in the Age of Augustus*, Ann Arbor, 1988, pp. 201-203; 210f.; Spannagel, op. cit., pp. 267-316; Kockel, op. cit., p. 291; Geiger, op. cit., pp. 120-122.
- 25) Zanker, op. cit., p. 211; Spannagel, op. cit., pp. 317-344; Kockel, op. cit., p. 291; Geiger, op. cit., pp. 126-128.
- 26) Zanker, op. cit., p. 211; Geiger, op. cit., pp. 61; p. 62, fig. 2; 96f.
- 27) Suetonius, *divus Augustus*, 29. 1: "Fori extruendi causa fuit hominum et iudiciorum multitudo, quae videbatur non sufficientibus duobus etiam tertio indigere; itaque festinatius necdum perfecta Martis aede publicatum est cautumque, ut separatim in eo publica iudicia et sortitiones iudicum fierent".
- 28) Ibid., 31. 5: "Proximum a dis immortalibus honorem memoriae ducum praestitit, qui imperium p. R. ex minimo maximum reddidissent. Itaque et opera cuiusque manentibus titulis restituit et statuas omnium triumphali effigie in utraque fori sui porticu dedicavit, professus et edicto: commentum id se, ut ad illorum vitam velut ad exemplar et ipse, dum viveret, et insequentium aetatum principes exigerentur a civibus".
- 29) Zanker, op. cit., pp. 211 はこの肖像のギャラリーがアウグストゥス時代のローマの目的に適した歴史の改定版を提供していると述べ、Geiger, op. cit., pp. 61-64 もこの広場が現実的な目的に役立つことはできたが、その建築計画はアウグストゥスによるローマの歴史の公式の要約を提供するものであり、新体制の理想を宣言するものであるとする。
- 30) Geiger, op. cit., pp. 137-162. なおアウグストゥス広場の金石文は、2000年に刊行された *Corpus inscriptionum Latinarum*, VI, pars viii, fasc. 3（以下では、*CIL* VI. 8. 3. と略記する）に改めて所収されている。
- 31) Geiger, op. cit., pp. 138-156.
- 32) Aulus Postumius (*CIL* VI. 8. 3. 40959); Marcus Furius Camillus (*CIL* VI. 1308); Appius Claudius Caecus (*CIL* VI. 8. 3. 40943); Gaius Duilius (*CIL* VI. 8. 3. 40952); Quintus Fabius Maximus (*CIL* VI. 8. 3. 40953); Publius Cornelius Scipio Africanus (*CIL* VI. 8. 3. 40948); Lucius Aemilius Paullus (*CIL* XI. 1829); Publius Cornelius Scipio Aemilianus (*CIL* VI. 8. 3. 40949?); Gaius Marius (*CIL* VI. 8. 3. 40957); Lucius Cornelius Sulla (*CIL* VI. 8. 3. 40951); Lucius Cornelius Lucullus (*CIL* XI. 1832).
- 33) *Res gestae divi Augusti*, 34: "per consensum universorum potitus rerum omnium, rem publicam ex mea potestate in senatus populi que Romani arbitrium transtuli."; Velleius Paterculus, 2. 89.3: "Prisca illa et antiqua rei

publicae forma revocata.”

- 34) Geiger, op. cit., pp. 129-137. なお、それらの肖像の中にはユリウス氏族の女性の像も含まれていたと考えられている。Ibid., pp. 131f. を参照のこと。
- 35) *CIL* VI. 8. 3. 40956. T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic* vol. 1, Atlanta: 1952, p. 45. ただし判読できるのはコンスルを務めたことと、コンスルもしくはプラエトル相当の権限 imperium を有する何らかの職務を務めたことのみであり、氏名を含めた全てが推測に基づく復元の結果である。Geiger, op. cit., pp. 133f. を参照のこと。
- 36) Ibid., pp. 133-136. Gaius Iulius Caesar pater Divi Iuli (*CIL* VI. 8. 3. 40954) ; Gaius Octavius pater Augusti (*CIL* VI. 8. 3. 40301) ; Marcus Claudius Marcellus (*CIL* VI. 8. 3. 40318) ; Nero Claudius Drusus Germanicus (*CIL* VI. 8. 3. 40330). なお、Geiger, op. cit., p. 93 & pp. 135f. は、大ドルーススの兄であり後に第二代皇帝となるが、前2年当時にはロドス島で実質的亡命生活を送っていたティベリウスの肖像が置かれていた可能性を論じている。この議論は、*CIL* VI. 8. 3. 40335 における編者 G. Alföldy の主張を踏まえたものであるが、筆者はティベリウスの像が置かれていた可能性は低いと考える。
- 37) Zanker, op. cit., pp. 215-223; Geiger, op. cit., pp. 65f.
- 38) D. Kienast, *Römische Kaisertabelle: Grundzüge einer römischen Kaiserchronologie*, 2. Aufl. Darmstadt 1996, p. 65; p. 74f.
- 39) Vittinghoff, op. cit., pp. 13-47, esp. p. 13.
- 40) 例えば、Varner, op. cit., p. 1.
- 41) Vittinghoff, op. cit., p. 13.
- 42) Livius, *Ab urbe condita*, 2. 41.
- 43) Ibid., 4. 13-16.
- 44) Ibid., 6. 17-20.
- 45) Varner, op. cit., p. 16; Flower, *Art of Forgetting*, pp. 44-52. なお、Ibid., p. 49 において Flower は、非常に乏しい証拠からでも初期ローマにおける記憶の制裁が、一義的には国家ではなく家の領域に属すると看做されていたことを支持していると述べている。この見解は内容的にはあるいは正しい主張かもしれないが、史的にはそのような判断を下すには無理があるのではないかと思われる。
- 46) Plutarchos, *Gaius Gracchus*, 17.7.
- 47) ibid., 18.3.
- 48) Cicero, *de domo sua*, 102.
- 49) Id., *Pro C. Rabirio Perduellionis Reo*, 24
- 50) Id., *de legibus*, 2. 56; Valerius Maximus, *Facta et dicta memorabilia*, 9. 2.
1. なお、マリウスとスッラの間の「記憶」をめぐる争いについて詳しくは、

Varner, op. cit., p. 18 および Flower, *Art of Forgetting*, 86-98 を参照されたい。

- 51) Plutarchos, *Caesar*, 6 によれば、前 65 年、マリウスの妻の甥カエサルがマリウスの記念建造物・金石文を再建したことが伝えられている。
- 52) Flower, *Art of Forgetting*, pp. 104-107.
- 53) Varner, op. cit., pp. 18f.; Flower, *Art of Forgetting*, pp. 116-119.
- 54) Flower, *Art of Forgetting*, pp. 118f. なお「アウグストゥスの家 domus Augusta」の意義については、拙稿「ティベリウス政権の成立とその性格」『学習院大学文学部研究年報』第 47 輯 2001 年、29-54 頁、「ローマ帝国の王権—ローマ帝政の成立とその性格—」『岩波講座 天皇と王権を考える 1 人類社会の中の天皇と王権』岩波書店 2002 年、191-212 頁および「ドムス・アウグスタと成立期ローマ帝政」『西洋史研究』新輯第 33 号 2004 年、24-48 頁を参照されたい。
- 55) R. Bauman, *Impietas in Principem : A Study of Treason against the Roman Emperor with Special Reference to the First Century*, München 1974, pp. 109-134.
- 56) Tacitus, *Annales*, 2. 27-32.
- 57) Ibid., 2. 32. 1 : “tunc Cotta Messalinus, ne imago Libonis exequias posterorum comitaretur, censuit, Cn. Lentulus, ne quis Scribonius cognomentum Drusi adsumeret.”
- 58) Tacitus, *Annales*, 2. 82. 5 : “hos vulgi sermones audita mors adeo incendit ut ante edictum magistratum, ante senatus consultum sumpto iustitio desererentur fora, clauderentur domus. passim silentia et gemitus, nihil compositum in ostentationem ; et quamquam neque insignibus lugentium abstinerent, altius animis maerebant.”（なお訳文中の括弧は筆者による補いである）; Suetonius, *Gaius*, 5 : “Quo defunctus est die, lapidata sunt templa, subuersae deum arae, Lares a quibusdam familiares in publicum abiecti, partus coniugum expositi.”
- 59) Tacitus, *Annales*, 2. 83.
- 60) Ibid., 3. 10-15.
- 61) Ibid., 3. 15.
- 62) Ibid., 3. 16-18.
- 63) ゲルマーニクスに関する元老院決議を刻んだ青銅板は、「シアールム青銅板 tabula Siarensis」と呼ばれている。この元老院決議のテキストは、J. González & F. Fernández, “Tabula Siarensis”, *Iura*, 32 1981 (1984), pp. 1-36 ; J. González, “Tabula Siarensis, Fortunales Siarenses et municipia civium Romanorum”, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 55, 1984, 55-100 で

公刊されているが、本稿では M. H. Crawford ed., *Roman Statutes*, London, 1996, no. 37-38 (vol. 1., pp. 515-518) 所収のテキストを用いた。グナイウス・ピソーに関する青銅板は、「父グナイウス・ピソーに関する元老院決議 *Senatus consultum de Cn. Piso patre*」と呼ばれ、本稿では W. Eck, A. Caballos, and F. Fernánnde, *Das Senatus Consultum De Cn. Pisone patre*, München, 1996, pp. 38-50 所収のテキストを用いたが、このテキストは 1998 年に刊行された *Corpus inscriptionum Latinarum*, II² pars 5, 900 にも所収されている。

- 64) Crawford ed., op.cit., Tabula Siarensis Fragment (a), ll. 12f. (p.515) : "senatum populumque Romanum id monumentum dedicasse memoriae Germanici Caesaris"
- 65) Ibid., Fragment (b), col.II, ll. 22f. (p.518) : "quo facilius pietas omnium ordinum erga domum Augustam et consensu uniuersorum ciuium memoria honoranda Germanici Caesaris appareret"
- 66) Geiger, op. cit., p. 92.
- 67) *Senatus consultum de Cn. Piso patre*, ll. 27-70 (Eck, Caballos, and Fernánnde, op. cit., pp. 40-43).
- 68) Ibid., ll. 165-168 (Eck, Caballos, and Fernánnde, op.cit., p. 50) : "quo facilius totius actae rei ordo posterorum memoriae tradi posset atque hi scire, quid et de singulari moderatione Germanici Caesaris et de sceleribus Cn. Pisonis patris senatus iudicasset".

[付記 本稿は 2008 年 6 月 7 日に開催された学習院大学史学会第 24 回大会における記念講演の内容に手を加えて再構成したものである。講演の機会を与えてくれた学習院大学史学会と当日に適切な意見を述べてくれた聴衆の方々に感謝したい。]

(史学科 教授)